



32
3416
~13



曲亭主人著



里見八老傳

柳川重信畫

秋野

勝台院

溪齋英泉畫



八犬傳第七輯有序



世有奇才。然後奇書出焉。有奇書。然後奇評附焉。朱元晦曰。好人難得。好書難得。非但好人好書之難得。好評亦不易得。何者。人之好惡。不加之學之深淺。才之優劣。各有用捨焉。是故所讀書同。而其所取不同。譬若彼金聖歎水滸傳。評讀者駭嘆稱妙。以余觀之。未可盡為妙也。聖歎尚如此。而况其他乎。近見好奇之士。評稗史。徒搜索其瑕疵。批之以理義。便是圓器方蓋。更

鮮有不損作者面目。或聞余言，嘲之曰：稗說勝記，無用之冗籍。費工災櫻，安足道哉。嗚呼！憎無用者，不知用之所以為用也。人之一身，無貴無賤，所起臥不過一席。然多席為無用之物，廢之可乎？無用者有用之資也。余不貴虛文，所好乃經籍史傳，舊記實錄已矣。而每歲所著，莫非稗史小說，所以然者何也？書賈揣利，以求於余。余欲著之，書賈不願刻。既已著，無益恁地書也。三十有八年，于茲潤筆以購有用之書，則用之

與無用，不可得而分別也。宜乎大聲不入里耳。稗史雖無益於世，而寓以勸懲，則令讀之於婦幼，可無害矣。且也鬻之者，與書畫剞劂印刷製本，諸工咸以衣食於此，抑不亦泰乎？餘澤耶？乃者八犬傳復續稿，迨于第七輯，每輯有自序，讀者罕矣。又唯述愚衷於端楮，為知音解頤。文政十年丁亥冬十一月之吉。

曲亭主人撰

今歲
歲次
甲子



南總里見八犬傳第七輯摠目錄

○第六十二回

船蟲姦計說禮度

○第六十三回

現八遠謀赴赤岳

携短刀來縁連訪師家

與衆兇挑信道顯武藝

○第六十四回

現八單身與衆惡戰

○第六十五回

縁連牙二郎逐信道

逼媳一角求胎

劈腹雛衣仆雙

○第六十六回

斬妖邪禮度雪父怨

○第六十七回

丐毒婦縁連歸白井

禮度義捨家祿

船蟲謀脱縲綫



三之卷

二之卷

一之卷

八犬傳七輯卷一

清見世系

○第六十八回

穴山枯野村長救秋實

○第六十九回

猿石旅宿濱路誘濱路

謨仕官木二作豪留信乃

薦給事奈四郎擊四六城

○第七十回

指月院姦丈伴淫婦

○第七十一回

雜庫中眼代捕戌考

檢冤死竟元知姦

寓禪院舊識再會

○第七十二回

三十一僧敬五君

信乃道竹即謁甲主

○第七十三回

謬仇奈四郎喪頭顱

留客次團太誇鬪牛

卷七

養

五之卷

四之卷

南總里見八犬傳第七輯摠目錄終



武田信昌



一念所興
四知應怕
雲とあそんで
をまんはらう
まけ入る山乃
かひをありけり

甘利兵衛
元



奴隷
内

清泉堂藏

濱路



愀然相照鏡中
亦有與吾同憂
牡廉啼く磯山
ちのみ小おちり
かのう友とわひ
かたむ

濱路



清泉堂藏

一妻兩夫
黒白雲判

泡雪奈四郎
秋實

淫婦
夏引

四六城木工作

岡泉



由来汝之紅手拭
勝似妖狐戴觸體
子をわのふの活より
かきや妻意ふたの
雛子猫の勢

赤岩
牙二郎

假一角
赤岩武遠

岡泉





出来か

昔舟のたれ
 ちのまよひみ
 田河たえとま
 ねまよれば夜
 の友

著作堂

ゆき土郎文

押
 三



重出
 五のき

神全古精

冰輪冷艷擅清光銀漢斜添雁一行
船倚枯葭櫻樹岸人忘榮利宿
鸞傍翅姬哭子狂何甚在五思京
諷詠芳月色今宵千古似秋寒徹
水覺風霜 九月十三夜墨水賞月再事

玉照堂主人



南總里見八犬傳第七輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第六十回

船中奸計禮度不説く
現八遠謀赤曲不赴く

交遊の厚薄き只その損益二友ありとをその志愜ざるの肝膽を
猶胡越のごとくその志同はなき千里とのふも合壁の似たり。紹前鞠再説犬飼
現八信道の下野州安蘇郡返壁の白屋の世を通る才子犬村角太郎
礼度と膝を交へ肝膽を吐き文を論じ武を講じ。主客の清談時移るまじく。
ほろく奥の折ら亦復て来る客あり。奴隸使の呼門高く。郎君をを
もる秋赤岩とあむ母公の詣来。存るひあはれ今や首といひまじく又外面へ
走去。いざ登時犬村角太郎。現八よろち對ひ。あひまじく母訪る。ハ

何事やらん。縛のあろを。沿る。死の紙門の。あろ。之。避。あ。然。その。あ。ま。く。
 ざる。且。横。臥。多。う。と。い。ふ。現。八。領。ま。き。そ。の。あ。ろ。沿。て。い。へ。せ。く。と。い。ひ。は。て。刀。を。
 合。つ。行。囊。さ。ひ。ひ。あ。い。そ。く。引。提。と。さ。る。次。の。間。へ。退。け。角。太。郎。も。な。を。被。て。
 紙。戸。を。や。を。り。閉。ま。り。有。如。之。程。船。虫。ハ。轎。子。を。立。出。と。途。よ。り。七。相。伴。の。媒。人。
 氷。六。共。侶。の。後。方。の。立。せ。し。十。字。竹。典。を。尊。の。庭。へ。昇。入。さ。り。誘。と。を。り。縁。
 頬。よ。り。坐。立。の。う。ち。登。ま。り。角。太。郎。ハ。遠。く。裡。面。よ。り。障。子。を。推。開。と。こ。の。次。
 へ。ひ。の。死。母。御。前。よ。く。そ。来。ま。り。氷。六。使。も。こ。る。と。誘。ハ。辭。他。事。も。あ。ら。な。く。
 伏。立。と。迎。え。六。船。虫。ハ。莞。然。と。上。坐。の。著。く。程。氷。六。之。謙。遜。り。て。地。爐。の。
 邊。の。坐。を。占。る。を。角。太。郎。ハ。不。請。登。と。茶。を。薦。め。る。と。さ。る。心。待。態。心。の。船。
 虫。ハ。半。の。ま。き。扇。の。風。を。宵。月。の。あ。ろ。の。戦。ぐ。と。霎。時。あ。ら。ご。見。廻。り。畳。む。
 扇。を。側。の。指。と。膝。を。進。め。と。喃。角。太。世。の。も。秋。の。央。を。過。と。朝。夕。を。最。大。う。

身。入。む。風。の。厭。死。の。恙。も。あ。ら。く。歡。び。の。り。今。さ。ら。改。め。い。の。要。る。死。と。
 なる。初。此。の。錯。悞。ゆ。親。子。口。舌。の。起。り。より。果。ハ。珍。ま。く。釋。之。死。妹。と。
 使。の。之。狄。爹。々。公。公。ま。り。斯。引。別。と。居。更。ハ。安。否。を。問。す。も。あ。く。胃。苦。
 老。死。を。は。ぞ。知。ら。ぬ。世。間。舅。姑。の。言。仿。る。あ。の。鬼。々。死。繼。母。が。不。忍。心。出。せ。と。
 ぞ。い。る。憎。ま。役。ハ。吾。侪。の。信。り。と。い。ふ。角。太。郎。嗟。嘆。と。そ。の。宜。ハ。ま。る。と。さ。ら。
 親。子。の。間。ハ。髪。も。容。ま。ず。只。是。天。性。の。あ。り。身。不。肖。の。り。ゆ。ら。く。親。の。
 愛。を。失。ひ。不。孝。の。罪。の。怕。く。且。悲。し。ま。勝。ま。ず。只。願。道。世。の。願。ひ。あ。る。
 垂。簾。て。の。ま。ゆ。と。然。り。と。親。の。う。ろ。も。一。日。隻。時。も。忘。る。間。さ。ら。ち。敷。ぎ。と。
 い。ひ。あ。ら。ん。安。否。を。あ。せ。ん。と。狄。鞞。逆。さ。る。訪。来。や。れ。ハ。有。之。死。を。承。り。
 時。々。氣。候。の。順。さ。る。ぬ。家。尊。の。大。人。ハ。腰。痛。の。持。病。の。發。り。あ。ら。な。と。問。ふ。
 船。虫。微。笑。と。否。持。病。ハ。發。り。あ。ら。と。昨。宵。初。心。の。弟。子。達。ハ。卷。葉。を。射。さ。り。

つ背後亦立ち。左せよ。右せよ。と誨む。その折のるぞと。初学の癖
 むれ腕狂々。卷蒙の柱へ射つる箭の飛入り。そこを大人の眼を大く傷
 らしめ。矢と出る。小駭く。角太郎。そ安らぬる。その瘻の浅深。いふと急ぐ
 問ふ。さきとよ。背飲く。やあぬ。ねども。亦浅瘻。ぬる。を素より悍き大人。これ。

て。多つら。その空前を抜捨つ。瘻を洗ひ。茶を布く。今朝。わが吾侪。あ。知らざ。

起臥。志。あひぬ。た。あ。わ。とも。立働きの心。懺む。も。わ。ぬ。曲。録。小。身。を。倚。多。く。

訪。ま。る。人。四。表。八。表。を。うち。相。譚。せ。く。さ。り。氣。も。あ。ら。ん。慰。め。あ。ふ。の。ら。面。色。

さ。あ。生。平。あ。ら。ぬ。苦。痛。さ。と。推。量。と。患。入。り。も。い。と。多。く。側。病。者。吾。侪。が。苦。さ。

醫。師。も。既。に。三。入。も。招。き。あ。げ。れ。即。功。る。か。る。と。た。ぬ。神。佛。の。利。益。を。祈。る。優。上。

わ。ら。と。あ。へ。嚮。小。宿。所。を。出。く。日。出。の。神。社。へ。詣。る。程。に。犬。村。川。の。下。ゆ。く。水。六。

叟。よ。呼。び。ら。ら。と。く。猛。小。宿。所。に。あ。れ。が。扱。珍。客。を。伴。ふ。ら。は。と。り。下。の。や。叟。よ。

年寄甲斐。不續。多。大夫。替り。ぐ。俊。映。わ。ら。ん。と。い。ひ。つ。吻。々。と。うち。笑。ふ。水。六。が。

や。く。進。出。す。喃。犬。村。の。郎。君。赤。石。大。人。の。刺。傷。片。眼。を。喪。ひ。あ。ん。の。命。め。で。

比。よ。と。預。り。る。雛。衣。と。あ。る。さ。う。い。ま。い。ら。へ。も。諫。め。も。涙。の。乾。く。隙。あ。ら。ず。

然。か。と。又。日。出。女。中。を。舊。の。宿。所。へ。か。へ。ぬ。あ。ら。ぬ。と。あ。ぬ。ら。る。さ。う。い。ふ。と。も。ま。れ。が。

走。り。出。く。巷。路。躲。れ。を。せ。ら。る。あ。ら。困。果。と。老。丈。婦。が。張。番。と。い。ら。ら。ま。は。

け。も。け。ん。と。抜。出。く。何。の。程。ゆ。れ。を。あ。わ。ら。ぬ。も。措。き。追。追。も。彼。吐。索。求。る。

程。に。犬。村。川。を。柴。樽。橋。より。身。を。投。げ。せ。ら。る。を。遠。く。入。り。後。方。より。走。り。着。

け。抱。き。禁。め。く。將。と。か。か。さん。と。い。ふ。も。既。に。必。死。を。究。め。ら。り。放。ち。更。と。身。を。拵。れ。

留。る。べ。く。も。わ。ら。む。折。ら。赤。岩。を。わ。り。母。御。前。の。日。出。詣。の。か。へ。さ。り。轎。子。吊。り。

件。の。橋。近。つ。死。に。ま。る。を。呼。び。を。が。く。加。勢。小。憑。と。あ。ら。せ。り。せ。く。身。を。拵。く。諫。め。ら。る。

叔治やを商量せよ。なしくせむと宣ふを。ちうらふ同道致し。と。ゆへ船虫語を
 續く。喃角太との向ふのひらき。うらうら。生る親と。悪棍ぞと。いふ。五口侘を世の
 人ふよ。多きまゝ。るめ。あ。ぬ。ど。只痛。衣。籠。衣。籠。飽。も。せ。中。を。此。の。言
 語の錯誤より。去れ。久し。媒人許かる。歎き。身を措き。死を必し。訣め
 する。心の中を。汲み。汲み。大村川の。浅る。要時共音。あ。ち。は。い。ひ。あ。あ
 ち。ち。ち。ち。十字竹。興。あ。ち。乗。り。路。を。が。く。將。と。来。つ。る。五口侘。が。あ。ん。あ。ん
 土産。よ。や。心。ぬ。入。む。と。も。よ。何。事。の。宜。ふ。好。も。万。も。五口侘。は。顧。り。受。納。め。く。あ。ん
 ち。ち。ち。ち。公の。機嫌。の。よ。折。ぬ。勸。解。る。方。便。い。ら。も。あ。ら。ん。枉。と。兼。引。ぬ。い。ひ。と。他。事
 ち。ち。論。と。善。心。実。意。へ。表。皮。を。う。の。空。情。と。あ。あ。ぬ。ぬ。角。太。郎。の。ち。驚。き。く。貌。を
 改。め。今。あ。ち。ぬ。ぬ。と。あ。ら。大。と。あ。ぬ。ぬ。慈。愛。の。彼。の。お。お。扶。其。さ。あ。再。生。の。死
 去。ひ。あ。れ。ど。親。は。稟。う。勤。當。を。免。さ。と。と。七。離。別。の。妻。と。ひ。あ。ん。を。う。ん。へ。と。ろ

ち。ち。と。推。辞。を。船。虫。使。あ。む。如。右。も。あ。ん。無。理。あ。ぬ。も。吾。侘。が。あ。ん。と。異。病。病
 平。愈。の。加。持。祈。禱。も。慈。悲。善。根。の。優。め。あ。ぬ。い。や。ら。ぬ。も。離。衣。が。必。死。を。途。の
 極。ち。も。あ。ん。身。と。ひ。あ。ん。せ。措。ぐ。又。只。幼。勞。を。倍。さ。す。の。價。作。と。魂。を。容。む。と
 い。ひ。え。世。話。の。似。と。真。の。功。徳。の。あ。ら。ぬ。必。死。を。極。め。そ。う。の。情。願。を。遂。さ。し
 ち。ち。と。真。の。陰。徳。慈。善。の。善。報。の。何。処。へ。邁。く。死。の。功。徳。を。の。ち。々。々。公。の
 疾。の。ち。ち。瘥。り。あ。ん。始。終。あ。ん。身。の。孝。行。の。空。一。から。ぬ。と。あ。ん。の。これ。ら。の。道
 理。を。あ。ん。親。の。道。衝。く。子。の。心。を。下。す。潜。ひ。こ。へ。訪。も。来。し。況。も。や。舅。姑。の。あ。ん
 ち。ち。當。ら。ぬ。離。縁。の。娘。を。あ。ん。身。の。勸。解。と。復。せ。と。得。し。と。あ。ん。情。由。あ。ん。を。い。ひ。あ
 ち。ち。父。々。公。の。為。あ。ん。身。の。為。を。あ。ん。か。く。も。不。快。辞。ひ。あ。ん。然。あ。ん。尋。思。を。あ。ん
 ね。と。説。諭。さ。る。角。太。郎。の。有。无。の。答。あ。ん。當。惑。の。宵。安。ら。ぬ。頭。を。低。く。あ。ん。あ。ん
 ち。ち。り。登。時。媒。人。氷。六。を。脚。を。鳴。ら。ぬ。感。嘆。の。声。も。調。子。を。あ。ん。て。呼。聲。明。き

女中ぞか。日比えづふ烈しく五分でも透ぬ性あるむか。かくやまぐ善ゆも強うト。
 愚心魯さうける俺們せら。よく吞する意見の妙葉経験の信と見ゆめるぬやよ。
 郎君いふふさやまぐ。美引申せむと急しく勸め諭さむと。角太郎へさき言を釋さ。
 ちうそく頭を擡ぐ。親ゆも他ゆも我回とる。厄會を被奉る。この牙の不肖と恥く。
 親の勘當免まむと。雜衣を召復さへ。本意の背く所行なれども。そを將大人の
 疾平愈の爲と。教諭さむ。遂に脱る方も。孝子の已を空うさる。親の
 為にせざるるあむと。そをせざるの事を。事後の大人ゆえ。當國をせら逐る。
 とも大人の金瘡瘡まぬ。歎きの中の驩び。親の爲ゆ。死をさも辞せ。況く
 夫婦の間ゆ。此の理義の違ふを。左も右も計らむ。といふ。船虫歎か。扱ハ
 納得き多ゆ。か早ぬ商量整正ゆ。かむる。急死するゆ。喃阿水人雜衣をさ。
 とくころへ呼ぶむ。といふ。氷六らる。自ぬ笑つ。縁頼ぬ立野。その竹興とへと。

呼寄まむ。轎夫們が。ころろと。擡起し。縁頼の框へ。躬と横著の筵簾を
 反賜し。誘さる。と氷六が。杖出せど。力る。船虫。苦の寔。且。雨中の花弥生の
 後の雜衣。浮世の秋の韓錦。飽ぬ。蜂地の所。天の宿。ふあん。地の歡。し。袖ハ
 さ。乾ぬ。濡衣を解。ん。ま。ぐ。た。る。ぬ。夏。身。の。と。面。目。も。又。今。さ。ら。不。泣。自。乃。
 残の雪の白粉。眼色を。ま。の。落。合。坐。席。扶。掖。と。姑。の。背。後。の。と。不。坐。ま。れ。ども。
 額。く。隨。ぬ。擡。得。ぬ。頭。病。と。重。げ。る。船。虫。さ。ま。と。え。之。と。喃。雜。衣。是。首。と。彼。首。と。遠
 う。ね。角。太。郎。不。説。勸。め。る。聲。の。趣。の。ゆ。え。け。め。け。り。故。の。妹。仗。川。山。迹。さ。う。む。も。
 睦。六。田。の。里。不。類。り。と。口。舌。の。塵。芥。擡。流。を。風。波。の。稍。を。さ。う。と。を。ん。身。の。娛。さ。う。
 必。ま。今。一。何。を。憚。り。と。遠。巡。を。ま。さ。と。あ。る。と。ま。へ。進。み。ぬ。ぬ。と。い。ひ。み。と。と。
 食。の。引。著。と。已。が。側。ぬ。を。ら。ま。れ。が。雜。衣。繞。ぬ。頭。を。奉。と。鈍。く。緩。ら。ぬ。言。語。ぬ。ぬ。
 の。と。ま。ま。盡。ぶ。る。と。死。お。ん。慈。愛。の。須。弥。より。高。る。氷。六。ゆ。も。この。月。が。大。く。幼。男。と。



八尺傳七郎卷一

十二 浦長



九尺傳七郎卷一

浦長

被^レた^レり^レた^レ時^ノの不^レ詳^ナは^レあ^レれ^ルも^レあ^レれ^ル親^ク切^クの^レ甲^斐あ^レて^レ絶^えと^せ玉^ノの^レ猪^も妹^也
仗^ノの^レ縁^も未^レ長^クと^レ再^レ結^び留^らま^して^レ恩^義何^レを^レ報^ふ死^身の^レ幸^ひふ^レ就^く
又^レ面^をく^レ倚^りと^レち^レ掩^み袖^の涙^を拭^かふ^も有^レ敷^キ恥^と良^人の^レい^ま何^レと^もい^ふ
ど^も唯^摩の^レ室^の毘^耶の^レ城^のい^はれ^の跡^を懐^ひと^も小^篋る^る水^六こ^とを^レ
尉^心と^も事^あると^死佛^の心^足を^レ戴^くこれ^レ人^情支^ら死^時の^レ香^も焼^ぬが^るべ^く
浮^世の^レ人^情を^レ口^舌起^す引^出さ^るも^も氷^人の^レ役^をを^レ思^ひ被^レた^レる^も
わ^らね^ど曉^比の^レ望^の月^がま^も圓^く納^りと^も宣^ふ千^秋萬^歳樂^千宮^の玉^の千
曳^の石^の重^荷を^レ十^々卸^しや^郎君^御深^窓を^レ受^とり^更結^と遮^とり^おう^せ
せ^ぞい^ぬる^比より^預り^置く^三行^半の^レ休^書之^レ及^故の^レい^はれ^の愛^を懐^ふ
こ^もと^懐帝^の間^を撥^撈り^さら^ず恭^く推^披き^や郎^君亦^肉せ^かる^物の^レ片^と
响^の身^は添^指ん^かいと^思ひ^食立^合せ^あ折^入今^面の^レ夏^虫せ^ん二^三刀^をと^推

操^く地^炕の中^へ投^棄且^火焚^と燃^立灰^埃を^レ舂^虫扇^のと^あ念^遣ひ^らら^しめ^り
微笑^く喃^角太^郎の^レい^はれ^の果^したる^も下^るる^も念^佛二^之味^と
うち^措く^朝夕^夫婦^睡く^参々^公の^レ勤^當免^さる^日を^レ俣^く俟^ぬ吾^侪を^レ
引^んま^繰り^損ふ^ると^離衣^も如^右ら^らぬ^不覚^るる^も一^年
三^百六^十日^口を^レ用^き笑^み日^のい^くも^も死^のを^レ親^子夫^婦の^レ間^もいと^美
あ^らる^のを^レな^らん^や有^身と^も月^も岌^も食^物も^レ起^臥ぬ^もう^づの^レ心^を
用^ひく^平け^く安^けく^産出^り死^んど^を今^も祈^りは^らか^らず^不憚^りの^レ関^の戸^の
半^開き^らう^あは^レ音^耗せ^る易^らざ^對面^のい^はれ^の難^う其^もま^らの^レ程^を
あ^らる^のを^レな^らん^や愛^の心^と尉^心ら^ま角^太郎^の離^衣も^レ感^涙の^レ落^るを^レ覺^え
額^つま^集て^あら^るく^御洪^恩を^レ得^ある^家尊^の大^人の^レ怒^瞋を^レ和^けら^る
恩^免や^ま見^参の^レ見^汲引^を願^ふの^レい^はれ^の舂^虫領^きそ^の又^いは^らる^も

吾侍の女才のあつたは喃阿水人衆の時も得りて誘退らんとひて
 立ちまると氷六も遠く推禁め且候使従者達の漫行せとわらんと
 外の外面に出入々其如く在る赤岩殿の奥の還らせぬ轎子を
 此方へとせむと喚る声の轎夫の心と共言と彼此より欠伸して起て
 寄る轎子を乗時候る船虫の浄も果て立出ぬ雑衣がわら得て
 言はる柄杓の懸水も落る石の苔衣老母草の珠の黄檀丹葉夕陽目映
 あり引東のあつた西面潜ひ北を思ひ縁頼よりぞ乗る轎子を
 送る客態の少許後れり氷六もわりの花さく老樹の歡ひあり夫婦の辞
 別定まらざりてのわら外は他事も多し傭を尋ね十字竹輿の足取
 せんと已む後吊七動揺々とや柴の片折戸迹を頼むと声ひられて
 杖のよする轎夫が楚と引閉と共侶は昔来し路いそだりさまた又船虫が

曩の地の流れ浪と赤岩角武遠の婢妾とありて後竟の後妻ふやで
 あり登りてその来歴を原るふまき歳の秋の比栗の武藏の豊嶋郡阿佐谷
 村に存し時その夫並四郎大田小文吾を害せんとて還り小文吾小研作
 その方の千葉の家臣なる畑上語路五郎が搦捕らんとて石濱の城の牽る折
 千葉の奸臣馬加六記常武資ふよりと辛く途より逐電と下野州荒山の
 麓村に落留り且く躲ま在りける程に赤岩角武遠が婢妾を求めとて媒
 妙なるのわらふ便り就く彼如く赴き一角が側室よりとて程もか
 後妻の執立らまらぬ船虫が男の媚る才ありと奸智の長言所以とて
 よの後の船虫の一角の家子なる犬村角太郎夫婦を憎まると誑言を
 りの件の夫婦を追出さるとそ養家相傳の田園家財を留めとて
 らの縁の善悪邪正と犬村の里人ホの大方をぞと知て恨憤るめ

皆角太郎を憐愍つ返壁草庵も彼里人のみ成ると又一角が男身
 け。赤岩牙二郎と呼ぶ悪少年中妻窓井が産るゆゆ角太郎が為成れも
 亦異母の弟あれども船虫子のをえが執まぬも継しを船虫左ゆも右も
 牙二郎をのこ愛慈まて隔る心ありたり以わらる牙二郎の心ざる直からず
 善を疎し悪を好む。残忍不善の癖者れば彼同氣相求め同病相憐む
 との古語似ゆるるべし。有此之程船虫良人の矢傷平愈の爲日出詰の
 火さる氷六呼ばけれ。さうも昔娘離衣が入水の必死を禁よといふ言
 候忽心の計較あまの正首の慰め角太郎許誘引る然れ言語を巧よ
 くと角太郎説勸め遂に夫婦を全うする肚裏の計策の速に成るるを
 歡びて往者小をいさるその日晡時赤岩なる宿所へ還る。一角小
 二云と角太郎がいひける離衣がうらさる巳が伎倆の趣を箇様々と其く

一角八耳を傾け執つと大なるも日出の神の冥助より你の利益冥捷徑
 さるる甘く行まるる目目の痺れ忽地愈む物を見るると左の眼の
 恙らぬ等しかるべし。微妙く謀り多しと頻り小答て已さけり。案下
 某生復説角太郎の赤岩帰ゆ人々の背影の見えざるを目送り果て
 船も母屋の退き隔の紙戸を推ひらき大飼主々々大無礼を仕りぬ誘
 不測の夫婦再會の妙を述べ角太郎の彼れを大く羨る面色の家
 音の呂律調の良声既の外洩れ。實客を驚せり。この款待といふは定ぬ
 面々のを現八慰めたる宜ひを唐山の還きむを傳へて大舜の
 聖人をも弟の象ゆ。父母の鼓舞夫妻ゆ。或ハ爪をのく枯田を耕し或ハ
 井の落く免とす。只眼前の成敗の始終の榮枯を論まべからず既ゆ

足下の孝あり加ふふ又貞烈の令政あり久後馮心いとひまをさうさう角
 太郎愁眉を飲め傍をええりや離衣こるえ進めと呼近つて大飼ゆ
 是る入荊婦よそのいれれ目をおついと引あはせむ現八を遠く膝を
 進めよ今政をまます秋某の下總浪人犬飼現八信道と呼そのい豊ふ
 友達の姓方を索ん為當圃小杖を曳より主人の香名せ願く日暮の
 懐ふ勝まけり柴の扇を敲き明教を受くいり捨る死むいあ
 既ぬも莫逆の友垣を結びて同胞兄弟も優ま心地ぬそいそつ交る年月の
 脩短さふ依る死やさふ古語ゆも蓋を傾け故が如し白頭も新なりと
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ
 思はれよと他事さくいと離衣さるるふらちえあびると憑心ま實さるふ

觸る今さら包んもゆらむとつむ心死るる儒衣さふ被せられ
 妾のまゝ良人もち犬村の家赤岩の寓居もあらで遠離る草の苔み
 草の床虫より外ぬ友もさる浮世の秋を身むの秋秋とあへ膽向ふ心細
 さを亡るやと慰心らまて歡ひゆりえぬ不樂住のゆき歎待とるゆら
 ともゆらまをもせせり長き旅路の風雨ぬ衣物の汚まらんを洗濯しと
 まぬれん袷衣を脱せぬひる代見出たまあまべ先を夕餉の準備をせむ
 やとゆら地炕ぬき寄り柴折焼を現八まつらくとええりて否措日短
 きふ昏飯さる程もる珍饈美食の魯聖の誠世願死るるはけと
 五友の環もあむ且あ夫婦のさも心かるとるヨウらつひひかて
 ちるもこの思慮を盡さん秋あつての継母船虫とを嚮ぬ某湖窺ふ郎
 才更辯の婦人さくの細亭の宿り也里人の言を傳ふ継子夫婦の強顔さる

いと腹黒泥滓の由とけふや、牙ハ表裏ゆる。儼然とて慈母ふ似て笑の中
 刃を隠し錦の囊に毒を包む言の虚実を察せむとて、下旨の迷ひの
 恐らく不測の殃危わらんをいふそと推し試み船虫とあれはるごとく。義理
 あり子に媳とてよも慈愛の心あり初より夫婦の為は尊大人の勸解も
 燃る薪油を沃き追遣し日比を歴りけし媒人の呼びられ、離衣との
 救ひとて彼水六めらも任せむ。将々説諭に絶る縁を結び
 留し恩義の枷を被らしし情由あり。死るるもや父子は只是天性に然れ
 他人の疑ひを容るる要る事とあれども、それ將時宜に依るべし。其の任
 赤岩赴き、等の虚実を探る。夫之省へ曾子の謹慎、速謀の逆身を
 護るの墙と柱との譏を容れ主人の賢慮いふそやと密に問はる。角太
 郎ハ沈吟し眼を開き、教諭宜しその由あり。あるの事とも、父も弟も

心剛ゆゑ客を愛まざるの事。他郷の人と侮りて送る怒りを引起さる。禍災
 其起らば、然らば亦測りかたし。この義いふと、向之其現ハ荒余とて笑て
 弱く強を征せ、柳の糸ハ雪折る。其彼知ま至る彼人々、礼儀をせ其某
 此を敬ふ。彼人々武をり威さ其某も亦勇をせ、餘ハ機ハ臨み愛ふ心
 欲する所ハ足下の為、等の虚実を撈質し、又只無異を揣る。わりの
 進むを離衣推禁せ、淡薄き女子のさし出口の、ぬぬ増げれる。赤岩の
 宿所ハ玉段飛伴、六月葦團吾、八黨東太、足淺太郎など、一人當千の塾生
 侍り、侮りある過失わん、とて又角太郎も犬飼ぬ、武備智術を、陪むとあ
 ぬも身單ぬ、危室ハ臨むハ寡なり、衆ハ敵する、ささ深念を、この余
 現ハ頭を掉く、某全く微力を憑き、心頻り、言ふ、あ、とて、虎穴ハ
 さるの、わん、虎の子を獲る、えらん、愚意の決断、已を、治る、疾、とて、

袂色を搔合かきあく。ををり背へ投被なげかけく。端引結はしりむすび刀を引提ひきあぐ。縁類えんるいの立
出だく。草鞋くさじ索くわひく穿締くわぢむ。夫婦ふうふハ禁とがめ多く。皆端みなはし近く出だく来きり
切きり今宵こんしやうハ休やすむ。翌あしたもく留とどめらふとも。何なに運たきぬわぶるを其そのも聴きぬめ
る。夕膳ゆふぜんもくせむらむら。とひを現げん八はちあむ古ふるのほうういかに。薄暮はくぼふ
る。路備ろびも人ひと求めく。饑うを交まへ。日ひ已こ来こ旅馴りょじゆんる。飢寒うるも苦くふ
な。玉たま六む必かな之の朱しゆ丸まる小こ吉きち左右さうりやうを俟まち更さらく。さらばとをう。足早あしはやふ赤岩あかを
投なぐ出だく。とを要もと時とき目送めぞうる。角かく大だい郎らう離りれ。只ただ文遊ぶんゆうの義信ぎしんハ感かんとく忙いそ
然しかと折をり口くちゆぞ立つる。も離り芭ばハ自生じしやうの玉蜀ぎよくも。懐なつ陝せんき庭ていなら。拂子はきハ似
る。紫髯むらさきひげと共とも身みの入いる子このち。達端たつたん緒緩じゆんび。駒下駄こまげを踏ふる。覆ひそ
ぬぶる。と夫おとこハ心こころつひらき。母屋ははやハ新参しんさんの妻つまハ勝かちふ。も。狎なぬ初々
とと樂たのし。の貌かほハわふ。とて。

第六十二面

短刀を携たづな来きて縁連えんれん師家しけを訪とふ
衆しゆ兒にと挑てんと信しん道だう武ぶ藝ぎを頭あたまと

却かえ説せつ犬飼いぬかい現げん八信はちしん道だうハ犬村いぬむら丈婦ぢやうふハ立別たちべつと。頻しばしばり路みちを急いそぎ。日ひも若わか西にしハ
論ろんむ比ひ同どう國こく真壁まかべ郡ぐんも赤岩あかの莊ぢやうハ来きり。途みち中なかつハ里人さとびとハ諮しる。赤岩あかハ角
武遠ぶゑんが宿所しゆくじよハ方かためと。と。外とハ立たて。彼此たがひをたぐる。この家いへハ三方さんぱうを板
垣かきも。南みなみ面めんハ衡門けいもんハあり。と。赤松あかまつの枝長えぢぢやうハ門かどを掩おほふ。傘
蓋かさハ似にたり。東あづまの庭ていハあ。樹こゝろ立たの脩しゆきハ短みづかきハ著おき。わ
紅べにハあ。秋あき色いろの目めハ爽さわ然ぜん。樹こゝろ傳つたハ鳥とりの声こゑをう。この庭ていのあ。武
藝げいの藝げいハ古ふる所ところと。撃うち合あは。被ひ声こゑハ木き刀やの音ねも。或あるハ笑わらハ或あるハ
罵ののる。動搖どうごうハ余あま念ねんる。如ごとく。現げんハ莫なハ介けハい。と。と。菅笠くさがさを
賢さとしハ夕陽ゆふやうの影かげを遮さり。件けんの垣かきハ在あり。在あり。裡うち面めんハ人ひとの歩あるを俟まちす。

秋の日は短く。黄昏近く。浩処の箇の武士の行装奇めく。純子の天我鶯絨の縁。野袴の長。朱鞘の両刀を跨ぐ。紫縮緬の三尺帯と端長の締。身長五尺八寸。眉の濃く眼圓。蒼髯。頤の元々。年齢四十。五十九。遠く。従者五六名を將。細草の。奴隷の鎗を持つ。鎧櫃を擔る。渡方。行轎子を吊。近つ。現八。只一角が奴婢。便り。外他。深。件の武士。現八。立。怪。げ。幾回。赤岩。角。衝門。進。供。若。黨。呼。門。ま。裏。面。執。達。の。若。黨。出。迎。引。客。房。へ。請。け。現。八。と。件。の。武。士。を。一。角。が。客。房。へ。け。と。悟。る。の。便。著。と。抑。今。

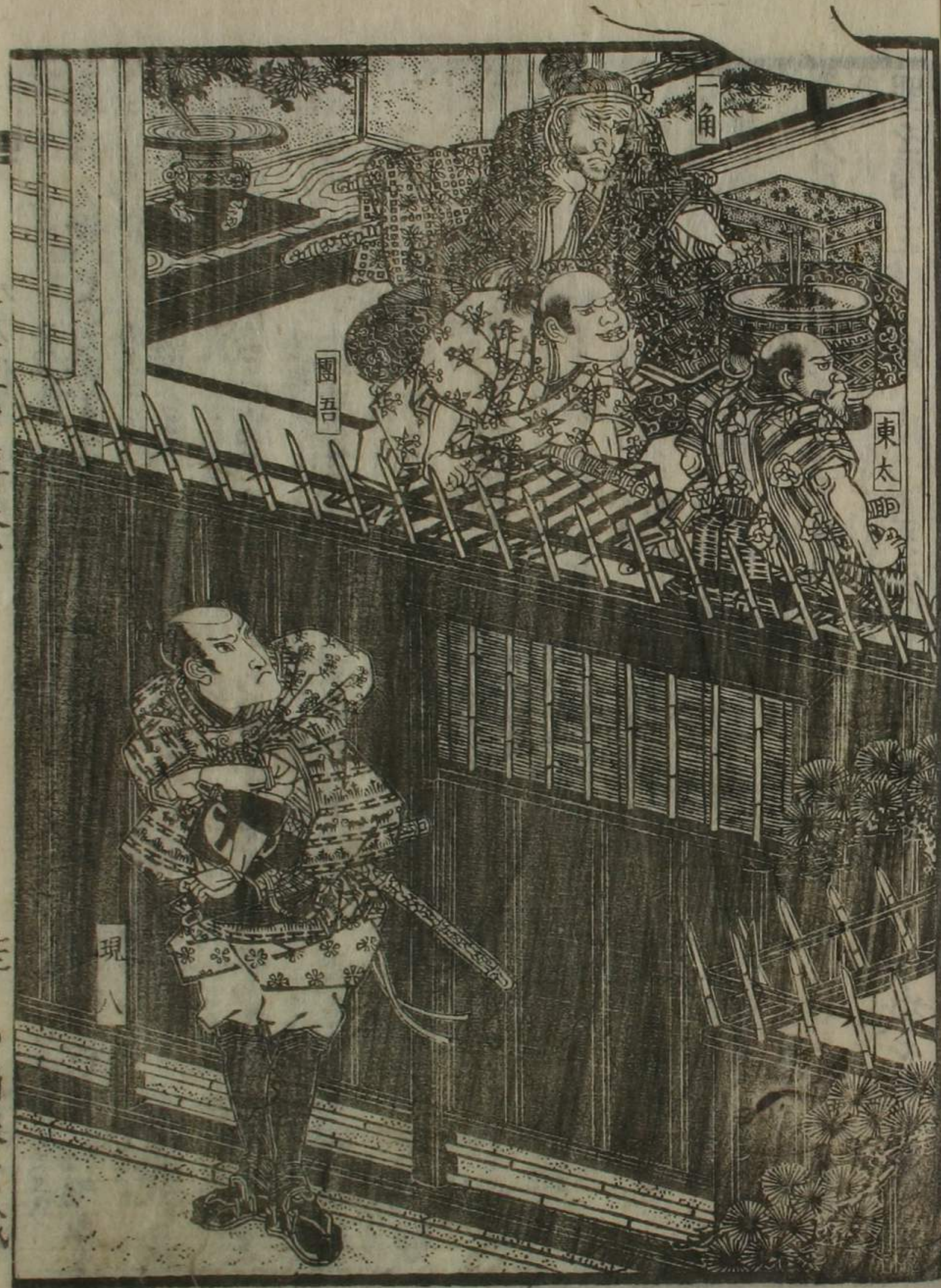
赤岩角が宿所へ詣来。一羈旅の武士を甚摩る。のぞと原る。是則別入。龍山逸東太縁連。され。件の縁連。今。距。ると。十七八年。寛正乙酉の冬。比。主。命。を。矯。く。杉。門。は。鄰。き。松。原。を。栗。飯。原。首。亂。度。主。従。を。残。害。し。已。が。宿。意。を。果。す。の。ら。その。折。嵐。山。の。尺。八。と。小。笹。落。葉。の。兩。刀。を。盜。賊。に。奪。と。畧。ら。刺。栗。飯。原。が。従。者。の。擊。漏。さ。す。の。の。ど。も。逃。く。赤。塚。へ。け。り。縁。連。進。退。谷。の。罪。を。免。る。の。の。け。は。その。霄。已。が。殺。兵。ホ。と。岩。櫛。る。古。寺。に。捨。措。け。り。忽。心。地。逐。電。と。些。の。由。縁。を。心。當。め。下。野。を。宇。都。宮。へ。赴。き。ま。も。武。藏。と。遠。く。仕。官。の。望。を。遂。ぬ。稱。を。同。國。赤。岩。の。郷。士。に。け。る。赤。岩。一。角。武。遠。に。素。より。武。藝。の。達人。に。弟子。三。百。名。あり。且。塾。生。も。少。く。ね。縁。連。ハ。又。縁。を。討。め。一。角。が。家。に。赴。き。初。一。兩。年。ハ。塾。若。黨。に。在。り。け。る。一。角。殊。に。技。萃。く。弟子。頭。に。立。つ。名。代。と。し。彼。此。を。替。古。の。席。へ。遣。け。縁。連。ハ。

年々武藝やうをく上達し悔るものありけり。有如之程小鎌倉山内家の
 内管領長尾判官景春越後上毛を伐靡けり。獨立の企あり。赤岩
 一角が武藝閑左の雙とよしの世の風声を傳聞と。若く使を遣り且聘を
 驚く。只顧渠を招き一角推辞と從ふ。某の邊鄙の野人なり。世を我
 隨に送らん。素より官途の望る。某が塾生小龍山逸東太縁連とのめ
 わり。その大刀筋の精妙なる某の劣りいふ。このめを召さば死と眞実と云ふ。
 まう若く介後使節往還り。絆ややくの整ひけし。縁連のめひけり。
 越後の春日山山赴きて。景春を仕へる。扱も逸東太縁連がその師一角の
 意の慥を。親の禄を給ふ。縁連の性奸悪ゆ。同門のめ共の好ま
 るもの多き。間々時々師小長と。その機を攪る。大之をぬき。一角
 小長を歡び。日爲なる。長尾家へ薦め奉る。その牙の代め。

かく又七八十年を歴る程小景春の去歳の秋。上毛白井の城在り。白井の
 原是長尾左衛門尉昌賢の居城なり。小往る享徳年間より。管領定
 正の有と。去辛景春正を獲。城普請とせ。程一日井を鑿て。下口の
 短刀を流す。これより景春の縁連を使と。赤岩許遣り。間話休題。
 一日赤岩一角の矢傷の疼痛をのめ。痔疾此の膏某を布して。白練の
 頭を執ぬ。四重一襦小を。曲録の眩を持。塾生ホグ。試撃する。ち目見と
 笑ひを催。折ら執達の若黨走り来。上毛白井の城中より。長尾殿の
 使小龍山氏の渡せられ。對面を請れ。計ひま。えや。の一角見
 久り。長尾家の使者なり。逆東太さ。け。會ん疾せ。と
 小若黨。果。客房の。退り。程塾生們。試撃を已。各々
 威儀を繕ひ。師の左右。侍り。右然程。縁連。彼若黨。案内を

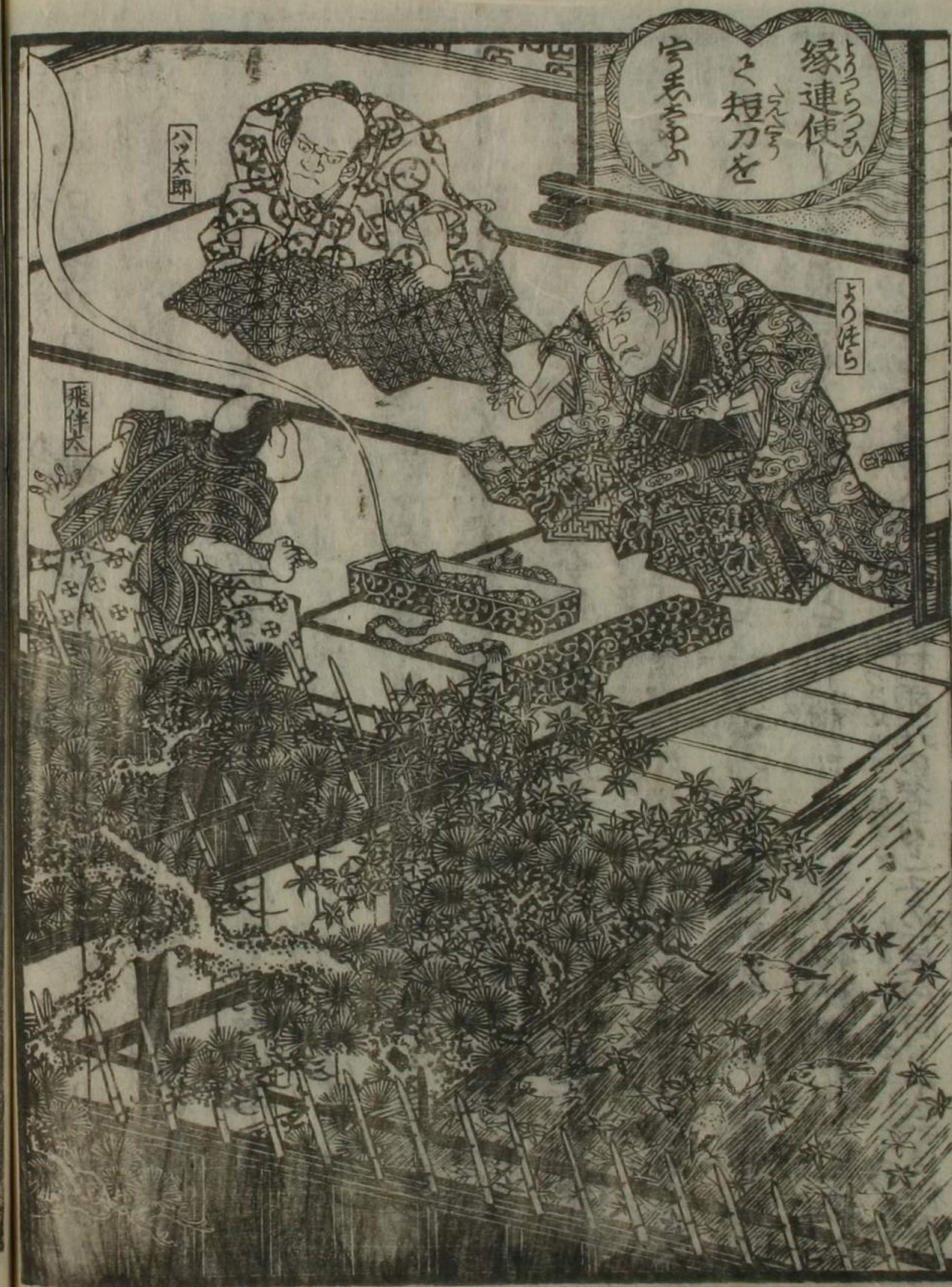
せられ。たもその席小入り。く遙小膝行頓首。仰ぎく。二角をくも。見す。辱う
 せぬ。く頭を擡げ。寒暖を述無異を祝せ。二面箇の童扈從。ホ。茶。菓。菓子。を
 羞く。形のぞく。款待。多。登時。一角。微笑。珍。珍。か。龍山。生。く。無異。と。云
 り。の。近。属。眼。瘡。の。患。ひ。あり。病床。の。對。面。へ。い。とも。無。礼。さ。る。所。行。く。れ。とも。懷。愛
 け。二。面。會。せ。り。く。侍。る。門。生。們。へ。み。る。相。識。せ。り。ん。ご。ん。ち。緩。坐。ぎ。て。相。譚
 る。と。い。ふ。縁。連。解。を。進。め。り。そ。の。あ。い。け。ざ。り。ぬ。を。目。を。傷。む。せ。ぬ。の。軟。脚。容。体。を
 し。め。ぢ。ぢ。痛。む。か。ひ。む。ぢ。や。と。問。ふ。を。二。角。使。使。む。否。と。う。う。う。瘡。ぬ。ぬ。わ。ら。ず。和。殿
 ぬ。る。比。の。乘。翰。ふ。去。歳。より。主。君。ゆ。從。せ。り。白。井。ぬ。在。城。ぬ。と。款。越。後。と。違。ふ。く
 路。の。程。も。遠。く。む。と。い。ふ。愛。こ。亦。る。も。猛。訪。る。る。甚。麼。さ。る。所。要。の。あ。る。や。う。ん
 と。い。ふ。縁。連。さ。の。這。回。の。参。向。私。要。す。あ。ら。む。即。主。君。の。使。え。ゆ。る。及。せ。ぬ。ひ。けん
 上。も。多。白。井。の。城。へ。去。歳。より。寡。君。の。ゆ。入。り。く。二。角。用。水。の。為。ぬ。井。を。數。釜。ら。れ。ぬ。

土中ぬ。一口の短刀あり。子揚。く。これを刀。る。小。長。八。九。寸。五。分。木。柄。ぬ。く。難。ぬ。木
 地。之。或。へ。い。ふ。木。天。蓼。を。の。く。造。る。の。の。これ。は。故。音。領。持。氏。朝。臣。の。物。あり。
 村。兩。丸。ぬ。あ。ら。ん。と。り。亦。と。も。彼。君。の。滅。亡。より。く。既。ぬ。た。り。親。の。年。を。歴。し。り
 る。と。い。ふ。これ。を。辨。する。の。あり。且。く。僉。議。を。凝。ら。す。と。い。ふ。所。詮。縁。連。が。師。匠。と
 せ。り。赤。岩。二。角。武。遠。に。當。世。无。二。の。武。人。ぬ。り。且。古。刀。の。鑿。定。も。と。く。の。考。る。の。の
 る。と。い。ふ。然。る。が。この。短。刀。を。縁。連。ぬ。り。一。遣。し。二。角。小。真。語。を。問。せ。り。王。石。共。ぬ
 分。明。さ。る。ん。と。く。下。野。へ。赴。け。と。る。君。命。を。稟。し。く。夜。を。目。小。繼。と。到。著。せ。り。御。眼
 疾。を。憚。ら。ぬ。無。心。の。至。り。ぬ。い。へ。とも。先生。鑿。定。を。下。さ。り。某。も。亦。面。を。起。せ。公。私。の
 幸。ひ。の。え。あ。ら。う。と。緯。詳。小。述。訖。り。く。携。來。つ。る。刀。の。相。を。恭。く。寄。せ。れ。ば。
 一。角。使。さ。り。ち。領。き。木。天。蓼。を。と。柄。と。る。鞘。と。る。短。刀。ハ。物。數。音。ぬ。く。と。珍。し。
 然。る。も。亦。疑。ひ。ぬ。愚。老。が。豫。く。傳。聞。す。村。兩。丸。の。名。刀。と。その。長。短。同。く。や。ぬ。且。村。兩。丸



角團五東太郎

現八



よのほら

飛伴六

うち振る毎ふその刀尖より忽然と水氣飛散るのどぞあるか。村雨と村雨あり。ぬる水氣をの七證とまじ。さういふの折のさうと只一眼の鑿定へと覺束る死。所為をれども目の暮ぬ間に見せ蓋をちひさく刃せぬといふ縁連あるなり。萌葱の幼解く再重箱の中より白氣立升り。隠々として一角が坐邊に靡。まき消失を縁連へ心も得ばむ。衣蓋を撥取ると裏面は袋のこめ。彼短刀へるりけり。短刀の顔色忽地上のどく。驚馬憂へて口よりもる。忙然とと半胸をり。かき急ぐ心を推鎮め。先生を箱を脚覽せよ。不測のう。そのるれ其かの短刀を預り奉りて首途。さうその日よを轎子の内へ入。或も若黨の持。あど七奴隷の手へ觸る。夜も亦枕引著く。等閑にせし。るるる。目今蓋をひきま。短刀の。既短刀紛失を。罪を得んと。僕僕。疾退き。従者も。下穿鑿仕らん。不敬を允らへ。と。

言語急りその譏を告ぐ。退き出んと。七げを。一角言ふ推禁め。籠山生且。等。短刀を従者。竊畧るの。あふ。後ひ。あふ。然るを。疑。救心。穿鑿。せ。功。身。過失。披露。を。嗚呼の。行。ぬ。ぞ。わ。ん。ぞ。ん。と。の。縁連。有理。と。曉。そ。ぬ。び。立。の。あ。り。ぬ。ぞ。あ。ふ。又。い。の。め。く。の。身。の。罪。を。免。る。べき。願。ふ。先生。教。え。ぬ。と。不。樂。し。げ。の。救。ひ。を。乞。ふ。と。己。が。一。角。と。と。嗟。嘆。の。堪。む。思。老。と。も。今。さ。う。い。ふ。術。を。さ。け。れ。ど。の。和。殿。立。立。り。て。さ。う。ま。ん。ぬ。師。の。一。角。の。眼。病。ま。り。と。床。の。あ。り。病。著。の。瘡。の。果。の。鑿。定。を。仕。ら。ん。その。日。を。短。刀。を。留。さ。せ。ぬ。一。角。預。り。奉。ま。り。前。後。相。違。の。さ。う。と。と。い。ふ。答。を。も。つ。ぬ。ま。ま。の。意。任。し。と。返。命。を。せ。え。あ。げ。る。且。當。分。の。罪。を。免。ま。ん。その。間。子。穿。鑿。せ。ば。か。の。短。刀。の。出。さ。ん。や。三。の。ま。か。旁。に。あ。ら。ぬ。慰。め。れ。縁。連。の。縁。色。を。直。せ。と。い。ひ。ま。ま。安。ら。む。當。下。一。角。が。左。右。の。月。夜。

團吾王坂飛伴太八黨東太位足潑太郎などい熟生ホキテ登く進出
 縁連小辞をひく悪るを祝し祝し或又短刀の紛失を悔ひ且慰め又且く
 相譚の程その日も既暮一六席上小燭を点く童扈従が持運が美酒珍饈の
 所狭まき按排ぐ縁連を管待せが一角が三男赤岩牙三郎後妻船
 虫も出くあつ皆縁連小対對する中船虫六初對面するは口の口誼を
 述盡く大酒醺ぬぞりぬける主客の献酬罍一盃屢巡り牙三郎の
 進出縁連小対對ぐ龍山生の當家の高弟をふむらふ人々も愈腹心の
 輩をば兄の如く弟の如く意中を盡く遊び更余のあれども某あつ邊鄙の
 弱輩なるもの江湖上の琦人を志も越後上毛の国々武藝の達者のい狄と
 同く縁連頭を掉く否某もさるるなご言は皆是似するゆゑ老先生の小
 指の頭も向ふたのいぬぞ某もさるるなご言は皆是似するゆゑ老先生の小

此は旅客がこゝの垣小舟をせき。試撃の音をゆる居う。おのふ渠入国
 国を武者修行するのゆゑあらんや立去るをさるる呼入且各々の大刀を
 刃考う。あそいと奥あるるるぞ。といふ飛伴太潑太郎東太團吾も雀躍
 し。おも考う。惜らふ時移り。日の暮れが立去り。飲も外出く一見
 まで。といひつ衆皆立んとさると二角ヤヤと呼禁め。噫喋々四人さる。うちも揃を
 ぐさる。團吾一人ぐる足りえその人今お海立在をぶともかくも説誘く。
 ともかくも文伴ひて。さるるといふ。さるる。團吾只はうと勇立く外面さる出ぬり。
 有然程。大飼現へ。赤岩が宿所の板垣のほろ久く立在。裡面より出る
 人を俟。日暮果ても便をぬぎ。ほろと必か。且愁み遠慮。いひ
 得る。日暮れ。初更前後小門を叩き。宿より後。了。体より。下。宵を
 此家小曉。さるる。さるる。一角が矢傷の浅深と船虫が言の虚実も定ふ知え。

と尋思をいふも初め程の忽地人あり挑灯を引提り
 角門より立出左見右見り現八がやうな進み近づき御邊に在る何処の
 人ぞとゆき伴侶を俟ゆる状と向き現八慇懃に不口某の下總浪人犬飼現八
 と呼ぶゆゑ獨行ゆく伴侶なき。當国不知案内なり。必す宿をとり後
 いで大家の止宿を乞ふと云ふゆゑ便宜をばさ久しく立在りといふ
 團吾の顔みそ痛く泣くゆゑ近曾主人の眼疾ゆゑ日夜徒然に堪へず
 辭敵を討る折にいさむるを通過せざりけ引えと疑ひる。誘ふと先か
 玄閑のやうな將を來つ二箇の奴隷を呼出。如此々と分付は奴隷の軀を
 小盃の温湯汲よりそを洗ひ現八の足を洗はせ。かく團吾の現八を玄閑の次の
 間ある禰室の甜心ゆゑの角の身邊に至りて云云と縁由を報
 け。是より先か縁連の東太飛伴太。磯太郎ホと又盃を巡りて團吾の

俟程の船虫の動もさす角太郎夫婦のるをわさぬの噂せしを牙
 二郎も亦相槌打つ父のやうな憚らぬと喋々罵り多。浩処の外
 出る月暮團吾のやうな。現八が緯の趣箇様々と報へ衆皆齊一
 をを拍も緯を成りぬとうち笑ふを一角急の推禁めく。やうなごうの件の旅
 客犬飼とや。現八とやら。下總浪人なるんぬ。二蓋松山城の弟子ゆゑの
 ぞん二蓋松古人の縦渠を死さす。今この團坐の入りも絶
 怖る敵のあつた。況その拙を受へん末々の弟子をわふれども小敵
 とく。名の侮ら過失ありんぬ。あつたと傲と衆皆一向の兼伏し。猛小
 威儀を繕へ程の團吾の又遠く。現八がやうの小到り。只今頼の一條を
 主人一角小達せし病中ぬかへも對面せしといふ。誘ふといひ多。先か
 立案内を。圓居の席へ伴ふ船虫のむと避く。屏風の背の躲は。意も

竊聞をうけ。有然程の現八を席末の列り。あつた對ひ今宵止宿の
 飲ひを述べ。一角の腕ををるち。遠遊の客人進み。其近曾病病の
 嬰アを。迎接の親まを不敬の用捨を更う。あつた弱冠の拙兒赤岩牙二郎
 又まゝるの悪心老が高弟今長尾の家臣。龍山逸東太縁連。又同席
 する杜校共。孰も皆塾生ゆ。彼某甲此乙某丙某のいと。箇々々小告
 ち。先が衆皆齊一膝を進め。不測の對面をを祝ける。且く一角の牙二
 郎をえり。犬飼ゆ。珍客をれども。不用意ゆ。管待を。食暴せ。肴
 ちれども。皿をまわらせ。余牙二郎のる。犬飼ゆ。弱年者の特小礼
 かき。所行をれども。巡り来つる小皿の。異議を。受て過へ。といひ。羞を
 現へ。恭しく受戴き。今宵の止宿を允さる。元是上幸福で。諸君の
 團坐の列り。酒宴の餘興の與る。目果報を。あつたといひ。いづくも貴意の

背ん。半受の飲盡。その皿を返せ。これより縁連も皆
 相識の為。現八をの敵手ゆ。献酬の時移る。武藝の誇る高
 笑ひ。酔ひ衆を。澁太郎。東太も共進。大飼ゆ。何ホの為。武者の
 地。遊歴を。あつた。消へ。向か。犬飼ゆ。武者
 修行。よ。あつた。縁連。若先生の鑑定。其も同案。進止を
 見。知りぬ。武邊の長。人の。と。虚稱。目を注。團吾。飛伴。太合
 笑。然。術藝の達人。下。大刀。教を受。欲す。此義。の。その
 現八。騒。氣色。諸君の。鑑定。甚。過。勿。論。某。武藝を
 嗜。武者。修行。の。あつた。各。位。の。敵。を。あつた。あ
 その。義。の。免。一。受。の。を。衆。皆。あつた。其。の。良。言。之。謙。退。る。是。も。非。も
 容。の。敵。を。あつた。牙。二。郎。の。諸。声。立。動。搖。懸。て。日。を。一。角。大。く。叱。り

禁めし。現八もうち對ひ仕伎們が大輕忽する。さき可笑く必まはけめ愚老か
 病中もさういふ。一刀試みいふ。あつたも似せ遺憾。切くこの仕伎們の
 教の幸ひうんと他事なういふ。現八も推辞ふようさうも領さく。武
 藝を業せざるも。只兩刀を帶る甲斐あかす。宜へ脱る路のいふ。
 誰々うこの教のといふ。衆皆歡び。童扈從を呼近つけ。この一室の隣り。
 稽古所の大さる。蠟燭殿上。火さう。準備立地の整ひけ。飛伴太ハ逆速く
 稽古所の柱の掛る。木刀三つと卸し。現八もさういふ。七本の執りうも擇
 免との。現八含笑く。いと短きを取。飛伴太ハ長きを拿。間の杉戸を
 開放。絶の中。跳入。現八も推續き。件の男と對ひ。さういふ。角を
 初ら。衆皆其方。さういふ。向へ。この時。おも竊聞する。船虫の物の隙より。
 勝負のふと。程。且。飛伴太ハ忽地。ヤツと声を被。撃んとするを

現八も。兩三刀受柱。遠巡を。け。飛伴太。踏。さ。び。撃んと
 する。處を現八も。引外。左の肩尖。丁と撃。さ。も。大。銳。き。大。刀。風。飛。伴。太。ハ
 苦と叫。矢。庭。仰。反。り。倒。さ。る。現。八。も。今。この。敵。手。の。眉。間。を。撃。つ。撃。手。を。一。を。
 尙。撃。殺。せ。る。と。只。その。肩。を。撃。つ。飛。伴。太。既。打。倒。され。さ。う。い。ふ。牙。を
 起。せ。か。さ。立。代。る。八。黨。東。太。参。る。さ。う。呼。び。さ。う。赤。檜。の。木。刀。を。閃。く。さ。う。勢。力。の。
 猛。き。を。現。八。も。と。ま。せ。六。七。合。撃。合。つ。ツ。と。嘯。く。右。の。拳。を。疼。痺。る。さ。う。い。ふ。
 撃。つ。東。太。持。つ。木。刀。を。之。間。む。り。反。飛。さ。う。怯。む。を。現。八。衝。と。さ。う。い。ふ。左。手。小
 襟。上。搔。抓。ミ。力。を。究。め。投。す。け。勇。士。の。手。煉。目。覚。く。東。太。ハ。背。を。壁。定。り。て。要
 時。起。も。治。さ。う。け。この。者。共。再。度。の。不。覚。か。存。一。慄。立。淡。太。郎。團。吾。も。俱。作。法。を
 素。し。く。西。人。右。より。左。より。只。陽。縮。の。閃。く。透。間。も。撃。木。刀。を。現。八。も。亦。右。手
 柱。左。手。拂。く。寄。せ。つ。け。三。人。の。被。声。撃。刀。音。ハ。冬。の。深。山。小。杉。木。推。る。斧。鉞。の。響。音。



八十八

八十八



八十八

八十八

異るも勝員も果とて程の現八も足を蜚しと團吾が膝を破と蹴返を
 刀の濃太郎が腰脇拂の早技の兩人齊一筋斗で足空さすの輾轉ひ四拱の
 秘釜を逆さるの植並の似うけり。既の四固の塾生六の皆直輪の負い難なる
 龍山縁連連の犬飼生頻の勝小乗也及びびとと受も負も恥辱を遺え
 よの撃殺さるも勇士の本意に誘真剣中も勝負せんその木刀の措定と言語
 急く呼ぶも野袴の稜結を刀を引提く立向へ現八莞尔と立ち笑も現
 勇一死所望の器械その義の貴意不任と某の恨もる死人を害さる心るけ
 と云る木刀こそ相応けは誘撃也と騒お膽勇憎さ悪しと縁連の応もる
 甘茶身を斜りと、琇四五寸抜蒐る臂を駐し拳法の秘決沈々ゆび引抜く
 刃を左へ拂き引組なり。縁連も亦覚ゆる臂力へ剛く骨逞しく身長六尺の
 近づき、拗んと刀を捨てる。炭の被りて角へも現八も席撃組撃捕物の

秘術を極し。坂東無雙の手焔煉るる組する依此些の撓む推せども突けども
 不爭の受身の剛柔進退法稱ひく。挑むの正半响をうり飽まぐ敵を疲勞
 考透を窺ひやと声なき。朽てる柱を抜く如く左へ控と操伏せも。登り蒐る
 動るせむ。坐席のさをも又かへり。諸君子勝負も又えつらんといひり膝を退
 けり。引起さんとする程小牙二郎の數人の不覚を見る目不樂く齒を切ら
 刀を引提身を起し。たる現八を撃んと進むを一角の声高き小牙二郎等と
 呼禁めり。身邊へ引著けぬらび立寄る。その間小現八も縁連を扶起しと。
 些も誇る氣色も。龍山ゆ。おん身の中の何処も痛さゆらむ。鄙語の怪
 我の功名大く無礼を仕やぬ且く休ひえり。といひと縁連答るより。只
 憤りも宵塞りく圓る目を睜るの遺る刃をとり揚る。そ依膝小飲
 どもを治らぬ怒を忍びく。目礼ら共侶の舊の席の著し。現八も濃太郎。

飛伴太東太團五右衛門対ひて諸君の懇望辭さる由を大の筋を
 受てりふ殆感心仕りぬ勝負の時依るめされ必小意あるをいふ
 四人へ領くの顔を背けり接尻者心さるめらるけり登時わ上角八咫を
 外へ現八を上座に請薦り扇を披き扇立々々々言語を改めぬ優言
 犬飼ぬいぬへの八幡太郎九郎判官をいふと右の右に出死其病中
 立の皆その器量の窄き所以弟子們ゆこの年来よく做しけり竊に遺
 恨を含むのめあると改め又一献酌ん僮共と銚子を替よといふ
 衆皆怒を斂又盃を巡るとぬ物蔭る船虫へ歎息者退きけ畢竟
 現八が武藝を顯し又甚なる話説うるそ次の巻小解分るを聴ぬか
 里見八犬傳第七輯卷之一終

七編 七巻之内 七

教の 清見堂院



七編七花月老

秋野 膳院